カミーユ・ピサロの晩年期における風景画制作

―《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》を中心に―

深尾　茅奈美　（京都大学）

カミーユ・ピサロは、農村風景を得意とした印象派画家として知られているが、晩年期にはパリ、ルーアン、ディエップ、ル・アーヴルの 4 都市に滞在し、繰り返し都市連作を手掛けた。《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》（個人蔵）もまた、1899 年から 1900 年にかけて制作された「テュイルリー公園連作」の一作品である。本発表は、この《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》の作品分析を中心に、晩年期におけるピサロの造形意識を考察するものである。

晩年期の都市連作は、リチャード・ブレッテルやジョアキム・ピサロの研究においても取り上げられてきた。いずれの場合も、アナーキズムやボードレール思想との関連から、都市主題に対する思想的側面を明らかにすることが目指されている。一方《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》では、人物描写を排除した静謐な風景を取り上げることで、都市主題というより、風景画としての性格が強められている。そのため、先行研究とは異なる観点からの考察が必要であるように思われる。

本発表では、以下の二つの問題意識を軸に、晩年期の風景画制作を再検討する。初めに、同じモチーフを繰り返し描くという制作形態が、ピサロにとっていかなる意義を持ちえたのかという問題を扱う。28 点に及ぶ「テュイルリー公園連作」には、《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》と同じ構図でルーヴル宮殿フロール館を描いた作品が、本作品以外に 10 点存在している。この一連の作品では、同じモチーフを扱いながらも、カンヴァスごとに筆触や色調の異なる多様な描き方が探求されている。同様の探求は同時期の静物画にも見受けられ、そこにピサロの画面構成に対する実験的な態度を読み取ることができる。

次に、そうした試行錯誤の中で生み出された《テュイルリー公園とフロール館、白い霜》の風景構成法について分析を行う。本作品は、単純化された形態と同系色でまとめられた色調が特徴的で、同時期に制作されたモネの「国会議事堂連作」と作風が類似している。しかしながら、モネの作品が平面的な抽象画へと向かっているのに対し、ピサロの作品は、空気遠近法を適用している点で、実景を再構成しようとする意図が強く感じられる。そうした手法は、これまで明確に指摘されてこなかったが、ピエール・アンリ・ド・ヴァランシエンヌの油彩スケッチに見られる風景構成法と同種のものである。したがってここでは、ピサロ自身も目を通していた可能性が高い、ヴァランシエンヌ著『芸術家のための実用遠近法提要、ならびに絵画、特に風景画についての省察と学生への忠告』（1800 年）を頼りに、本作品の風景構成に対する分析を行う。最後に以上 2 点の考察から、ピサロが連作という制作形態の中で、多様かつ斬新な描法を探求しながらも、伝統的な風景画制作に忠実であり続けたと結論づける。